

---

# 日本刀

---

平成13年度修復事業



品名：日本刀

所蔵：メトロポリタン美術館

所蔵番号：日本刀一覧参照

メトロポリタン美術館所蔵

## 刀剣および刀装の修理について

東京文化財研究所  
加藤 寛

平成13年度、別表のとおりアメリカのメトロポリタン美術館所蔵の刀剣および刀装類72件の修復を行った。刀剣は、刀・剣・脇財・短刀など39件を研磨した。研磨は、刀身全体を研がず錆びた部分のみを研磨する研継ぎで行い、表面に差込して伝統的な研ぎ肌をつけた。また、刀装では鞘の螺鈿や塗りの修復、金具の補填、柄巻きの巻替えなど細部にわたる修復計画を立てた。とくに、柄巻きでは通常の糸のほかに鯨の髯巻きがあり、オリジナル部分をできるだけ保存する方針で作業を進めることとした、さらに研磨の終了した刀身は、元の鞘には戻さずに新たに保存用の白鞘を新調しその中に保管することを決めた。保存用の白鞘は、アメリカでの乾燥した環境を鑑みて肉厚に削り、鞘の合わせ目をできるだけ確保するように指示をした。平成13年度修理報告では刀剣を中心に報告した関係で、本報告では刀装とくに鞘の装飾について報告する。メトロポリタン美術館の刀装は、江戸時代の鞘拵えのほかに明治以来の軍刀装などがあり、蒔絵、螺鈿、平文などで飾った美術的価値の高い鞘が多く見られる。

鞘は、黒漆を磨いた蠟色塗りが公式であった。江戸時代、武士は登城など公式の行事に蠟色塗りの鞘をはいた。このほか、上級武士の間では非公式の行事に用いた替鞘が流行する。替鞘には鞘塗りとよばれる変り塗をほどこす場合が多い。変り塗は日常品の漆塗りとことなり、漆の中に卵白を混入するかあるいは、漆の表面に種・刻煙草・棕櫚といった植物繊維を蒔きつけるなどの特殊な塗装をさす。また、宮中儀杖用の飾太刀には蒔絵、梨地、螺鈿などの装飾がみられる。メトロポリタン美術館所蔵の刀剣の鞘には、蒔絵、螺鈿などの装飾が見られ、これらの多くは軍刀装に改装する際に付けられ装飾であろう。また、鮫（梅花）皮は、江戸時代の大名の拵えに見られる最高級の刀装である。これらの刀装から代表的な作例を抜粋して次に紹介する。

脇差 銘 宗寛

塗名 潤漆蠟色塗り (図版番号1.19 整理番号9  
36.25.1702)

鞘の外面に黒漆と朱漆を混ぜた潤漆を塗り、さらに同じ漆を使って露玉を小尻付近と銀製の栗形付近に集めて描きあげてから蠟色に仕上げている。一見すると穏やかな塗りに見えるが鞘に付けられた金具と合間って装飾的な効果をあげている。金具は、鐔付に金の虎、小尻に4分1の飾金具、小尻の露玉の端に煮色の柿の実がそれぞれ付けられている。

脇差 銘 丹後守藤原直道

塗名 潤漆蠟色塗り・蒔絵・螺鈿 (図版番号2.20 整理番号15 91.2.86)

鞘の外面に黒漆と朱漆を混ぜた潤漆を塗り、磨いて蠟色に仕上げる。表裏の小尻から孔雀の羽を銀の薄肉高蒔絵で表わし、羽の中央に夜光貝の厚貝を象嵌する。金具は、柄に錦鶏と桜を金製金具の象嵌と木目金の研ぎ出しで表わしている。銀製栗形金具には牡丹文を掘り崩しで表わしている。

脇差 銘 下坂藤原国貞塗名

塗名 黒漆千段塗り (図版番号21 整理番号16  
36.25.1756)

柄から小尻までを小さく刻むいわゆる千段塗り。千段の上に黒、銀、金、4分1、青金、黒地を等間隔に作り飾とする。黒地には磨き地である蠟色とやや艶のない塗り立て地を使い分けている。また、銀地にも2種類あって銀と4分1の分を蒔分けて色の変化を作り上げている。モダンな刀装といえる。

脇差 銘 康継以南蛮鉄於武州江戸作之

塗名 青貝微塵塗り・高蒔絵 (図版番号22 整理番号18 43.120.643)

鞘の外面に細かく砕いた鮑の薄貝を蒔き付け、透き漆を数回塗った後、砥石と炭を使って研ぎだした青貝微塵塗りである。塗りと呼称されるが螺鈿の一技法で

ある。江戸時代は専門の青貝微塵師によって製作された。蒔絵は、小尻から鐔に向けて巾着、小槌、鍵などの宝尽し文様が金の高蒔絵と付描で表わされている。金具は鐔付と栗形に布袋を掘り崩しで表わしている。

短刀 銘 兼涌

塗名 黄漆塗り (図版番号3.23 整理番号21  
91.1.882)

鞘と柄を縦に刻み、黄漆を塗る。柄の刻みや金具などから胡麻殻あるいは枯れ草などの植物を表わしたと考えられる。また、4分1製の栗形金具の表面にも縦刻みが見られるところから刀装全体でひとつのテーマを表わしている。金具は、煮色に仕上げた銅製鐔および小柄の表に富士山の片切彫りが見られる。

打刀 銘 無銘

塗名 黒漆千段巻塗り (図版番号4.24 整理番号30  
36.25.1747)

鞘の外表面を小さく刻んだ千段巻きで黒漆を磨いた蠟色で仕上げている。千段巻きには木地を細かく刻むものと、漆の下地を盛り上げたもの、木地に糸を巻きつける方法などがある。一般的には木地を刻む方法が一番難しく、下地あるいは糸巻き製にする場合が多い。さらに鞘の刻みを受けて、柄には鮫(梅花)皮の上に鯨の髯巻きをほどこした格調高い柄巻きが見られる。

短刀 銘 重武

塗名 変り塗・高蒔絵 (図版番号5.25 整理番号36  
91.1.1885)

鞘の外表面に糊状の素材で虫食文様を描いてから潤漆を塗り、乾燥後、糊を溶かして樹皮を表わす。一種の伏描きの効果で文様を作る変り塗。表面全体に葛文様の高上げを行い、金・朱漆などを塗り分けて葛の葉を表わしている。金具は、目貫に金製の蛇、銀製蝸牛の栗形など鞘全体で秋の野外の情景を表わしている。

## 打刀 銘 無銘

塗名 黒漆蠟色塗り・蒔絵・螺鈿 (図版番号6.26 整理番号39 1976.150)

鞘の外面に23区画の印籠刻みを彫り、1区画ごとに平蒔絵と螺鈿で文様を作る。文様は、紅葉・菊・笹・木目・青海波・桐唐草などの文様と、麻の葉・紗綾形・輪違いなどの幾何学文様を平蒔絵で表わし、蝶・蛙・蜂などの昆虫類を白蝶貝・黄蝶貝の螺鈿と金具の象嵌で表わしている。蒔絵は、素朴な金の平蒔絵を用い主に線描による表現が軽快であり、蒔絵の見本板を見ているようである。

## 短刀 銘 月山貞一

塗名 変り塗・金具象嵌 (図版番号27 整理番号46 91.2.26)

鞘の外面に干潟を思わせる縦状の溝を漆下地で作り、潮溜まりの部分に松煙を蒔き、干潟部分に潤漆を塗る。さらに、潤漆の上部に露玉を共漆で描き、潮溜まりの部分には4分1製の4匹の小さな蟹と煮色製の親蟹が姿を見せ、ユーモラスに水際の情景を作り上げている。

## 脇差 銘 相模守源義道

塗名 鮫(梅花)皮塗り・柚田細工 (図版番号28 整理番号49 36.25.1705)

鞘の上部に大粒の梅花皮(かいらぎ)エイの皮を張り、黒漆を塗り重ね砥石と炭で平滑に研出して磨き上げた鮫皮塗りで仕上げている。鮫皮は、古来刀の柄に用いるためにインド洋から輸入した。鮫皮塗りは、刀の装飾以外に江戸時代初期には輸出用の家具に使われ大変流行をした。この鞘での鮫皮の用い方は上部に白色の鮫と下部を黒漆蠟色塗りに分けた見事な片身替わりである。また、柄頭と小柄には青貝を使って柳を表わした精細な柚田細工が見られることから、富山藩で製作された可能性がある。

## 打刀 銘 家次

塗名 鮫皮塗り・刻み (図版番号7.29 整理番号50 36.25.1748)

鞘の外面に細かい刻みをつけ、鮫皮を張り、白漆を塗り重ねて砥石と炭で研出し艶を上げた鮫皮塗り。通常、鮫皮は鞘に貼り付ける以前に裏側をなめして厚みを調節する。この鞘のように刻みの上に貼り付けるのはよほど裏側を薄くなるまでなめしきらないと張ることができない。裏側が薄ければ鮫の粒を強く支持することができないので、この鞘の鮫皮塗りはまさに究極の技術で完成したことになる。

## 脇差 銘 兼元

塗名 縦刻み・黒漆蠟色塗り (図版番号8.30 整理番号51 17.207.9)

鞘の外面に縦状の刻みを彫り、さらに横方向にも刻みを入れて垣根を表わし、全体に黒漆を塗り、笹の葉を黒漆で描いてから艶を上げた蠟色塗りである。黒地に黒漆の盛り上げは、夜桜塗りなどに代表される変り塗りの手法である。金具は目貫に掛け軸を持つ僧侶、栗形に4分1の地金に金象嵌が施されている。柄の形や金具から江戸時代の姿のよい脇差であることが窺える。

## 大、小打刀

銘 肥前国陸奥守忠吉 塗名 黒漆蠟色塗り (図版番号9.10.31 整理番号54 55 91.2.60 2000.294)

鞘の外面に黒漆を塗り、艶を上げて蠟色とする。その上に糊で文様を描いてから艶のない黒漆を塗り、漆の乾燥後、糊を溶かして文様部分から艶のある蠟色面を出している。黒漆の艶と艶消しだけで文様を表わす優れた変り塗である。この塗りは柄の鯨の髯巻きの艶と合間って上品な調和を見せている。収蔵品番号からこの大小は別の年に購入されたことが知られる。

## 短刀 銘 備中国住大隈権介平

塗名 青貝微塵塗り・金銀平文 (図版番号32 整理番号59 91.2.31)

鞘の外面に金の薄板を向蝶紋・蝶紋などの文様に切った平文を貼り、上から砕いた鮑の薄貝を蒔きつける。その後透き漆を塗り重ねてから、砥石もしくは炭で研ぎだして仕上げた。柄頭、小尻、鐔、栗形に番籠を透かした銀製の金具を付け、金具と塗りとが豪華さを競い合っている。

#### 短刀 銘 無銘

塗名 布目塗り (図版番号11.33 整理番号63  
36.25.1759)

通常、布目塗りは鞘の表面に荒い布を着せて、布目を埋めないように仕上げる。しかし、この鞘では一見布目に見える表面は、黄漆に卵白もしくは麩などの淡白質を加えた絞漆で一本一本描上げられている。絞漆は、通常の漆よりも粘着性に富み、肉厚に塗ることができるために糸目を描上げるのに適している。布目を模したこの仕事にはまさに時間に糸目をつけない努力が必要である。

#### 脇差 銘 無銘

塗名 刻み・黒漆蠟色塗り (図版番号35 整理番号65  
29.100.1378)

鞘の外表面を丸味のある刻みを彫り、黒漆を塗ってから蠟色に磨いている。刻みは鞘師の技量をもっとも求められる装飾である。それは、木地の時に作った刻みの痕が磨かれた漆面にはっきりと映るためである。完成した刻み鞘には絶えず緊張感がみなぎり、見るものを釘付けにする。表に打った蟬の金具は刻み鞘の緊張感を柔らげる効果を果たしている。

#### 短刀 名 吉光

塗名 黒漆蠟色塗り・金薄肉高蒔絵 (図版番号35 整理番号66 36.25.1716)

鞘の表面をやや丸く仕上げ、黒漆を塗って磨き仕上げを行った。その上に桜花、蕾など可憐な文様を金の薄肉高蒔絵で表わしている。薄肉高蒔絵は、漆を使って文様を1～2回ほど盛り上げてから蒔絵を行う技法

で、文様にやや荒い丸分を蒔き、表面に炭を当てて仕上げるために上研出蒔絵ともよばれる。さらに、この鞘の桜花には金粉を動かないように漆で固める際に、弁先に朱漆を用いている。そのために弁先がほんのりと赤く輝いている。蕊には平時絵の付描が見られる。

#### 脇差 銘 無銘

塗名 朱漆・黒千段塗り (図版番号12.36 整理番号  
72 91.2.78)

鞘の表面に朱漆を塗り、その表面に黒漆で細い縦線を描く。この千段塗りは、黒漆の下から朱漆が見える効果的な塗り方で笛巻塗ともよばれている。刀装は、柄の表裏に打った銀製の金具が笛巻塗に調和して上品な鞘に仕立てている。

On the Restoration of the Swords and Sword Accessories  
in the Collection of The Metropolitan Museum of Art

KATO Hiroshi  
National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo

During the fiscal year 2001, 72 items of swords and sword accessories in the collection of The Metropolitan Museum of Art were restored (See Appendix). The technique of *togitsugi*, in which only the rusted parts of a sword is polished, was used in polishing 39 swords of various kinds. Traditional method of warming the surface of the sword and polishing it with iron powder was used as a finishing process. Detailed restoration plan was made for the sword accessories to restore *raden* and urushi coating on the sheaths, reproduce missing metal fittings and replace cords wrapped around the hilt. Some of the cords used to wrap the hilt were made of material not available today, so an alternative material was selected. But it was also decided that as much of the original as possible would be kept. Rather than returning the swords to their original sheaths after polishing, plain sheaths were made for them. These new sheaths for storage were made by using thick pieces of wood, taking into consideration the dry storage condition in the United States. Since the report for the fiscal year 2000 centered on the conservation of the swords themselves, this report will focus on the conservation of sword accessories, in particular on the decorations on their sheaths. The sword accessories in the collection of The Metropolitan include those made not only in the Edo Period but also those used on military swords of the Meiji Period and after. The decorations on all these sword accessories range from *makie* to *raden* and *hyomon* and are of great artistic value.

In the Edo Period the formal style for sheaths was to use black urushi. Samurai warriors carried swords in these simple sheaths when they visited their lords on official business. On unofficial occasions, however, upper class samurai used sheaths with decorations. For many of these decorated sheaths, special urushi coating was used. For example, egg white was mixed into urushi, or seeds, cut tobacco or palm fibers were sprinkled onto the surface of urushi. Swords used for ceremonial occasions at the imperial court were placed in sheaths decorated with *makie*, *nashiji* and *raden*. The sheaths in the collection of The Metropolitan are decorated with *makie* and *raden*. It is assumed that many of these decorations were made when the swords were remade into military style. Also included in the collection are sword accessories using ray skin, which was considered high quality among the *daimyo* lords.

This report introduces some of the representative sword accessories from the collection restored (See Appendix on 139, 140 for the details of each sword and accessories described. The number refers to the list number on the Appendix.)

No. 9

*Urumi-urushi roiro-nuri*

*Urumi-urushi* is brownish urushi made by mixing black and red urushi. This urushi is applied on the surface of the sheath. Furthermore, dew-like drops of the same urushi are used to decorate the *kojiri* (the tip of a sheath) and the silver *kurigata* metal which are then given a shiny finish. At a glance, this decoration appears to be quite simple, but a close look reveals a very decorative effect created by the combination of urushi and the metal fittings. The decorations on the metal fittings include a relief of a gold tiger near the sword guard, *shibuichi* (alloy of copper and silver at a ratio of 3 to 1) metal fitting on the *kojiri*, and small copper persimmon fruits around this metal fitting.

No. 15

*Urumi-urushi roiro-nuri, makie, raden*

At the *kojiri* on each face of the sheath, which is coated with *urumi-urushi*, there is a design of a peacock feather done in thin, silver *takamakie*. At the center of each feather is a thick shell inlay of *yakogai*. The metal fitting on the hilt is decorated with a design of a hen-like bird and cherry flowers in gold inlay which is made on a surface of *mo-kumegane* metal (made by hammering several layers of various metals so that the finished surface appears like that of the grain of wood). A peony design is carved on the silver *kurigata* metal.

No. 16

Black urushi, *sendan-nuri*

*Sendan-nuri* is made by carving lines around the sheath, from the hilt to the *kojiri*, so that there are numerous stripes around the sheath. These stripes are decorated with black urushi, silver *makie*, gold *makie*, *shibuichi makie*, light gold *makie* and black

urushi in this order. The part decorated with black urushi is of two kinds: that with gloss and that without gloss. The silver part also is of two kinds: silver and *shibuichi*. The differences in tone thus created add a modern touch to the hilt and sheath.

No. 18

*Aogai mijin-nuri, takamakie*

*Aogai mijin-nuri* is made by sprinkling powder made of thin abalone shell pieces, applying translucent urushi several times, and polishing with a whetstone and charcoal. Although it is called "*nuri*," in reality it is a type of *raden*. In the Edo Period, it was made by a specialist of *aogai raden*. On the sheath, there are scattered decorations in gold *takamakie* and *hiramakie* of motifs associated with happiness, including traditional moneybag, lucky mallet and vault key. Metal fittings around the sword guard and *kurigata* are decorated with carvings of Hotei, a god of good luck.

No. 21

*Ki-urushi nuri*

The sheath and the hilt are carved with lines that run the length of the sheath and coated with *ki-urushi* (yellow urushi). Judging from the carvings on the hilt and the metal fittings, these lines are assumed to express sesame seed shells or dried grass. Since similar horizontal lines are also found on the *shibuichi kurigata* metal, it is thought that the entire design on the sword accessories follow one theme. The sword guard is made of copper. On the front face of the *kozuka* (knife attached to the sheath) is a carved design of Mt. Fuji.

No. 30

Black urushi, *sendan-maki-nuri*

There are three ways of making *sendan-maki*: carving lines on the substrate, using urushi foundation to make fine strips, and winding thread around the substrate. Generally, the first method is considered to be most difficult, so the other two methods are more frequently seen. The sheath in this case uses the last method. It is coated with black urushi. To match the texture of the sheath, whale fin is wound around the hilt.

No. 36

*Kawari-nuri, takamakie*

*Kawari-nuri* refers to special ways of coating urushi. In this case, starch paste is used to draw a design of insect damage on the sheath. After *urumi-urushi* applied over the design dries, the paste is removed with clear water to create a bark-like design. This is a technique very similar to batik dying. The surface is then decorated with raised designs of ivy vine, the leaves of which are colored in gold *makie* and red urushi. The gold *menuki* (metal fitting used to cover the rivet hole which joins the pommel and the tang of a sword) on the hilt is in the shape of a snake while the silver *kurigata* metal is in the shape of a snail. The effect created by *kawari-nuri* and the metal fittings is that of an autumn open-air scene.

No. 39

Black urushi *roiro-nuri, makie, raden*

The sheath is carved into 23 sections in a technique called *inro-kizami*. Each section is decorated with *hiramakie* and *raden*. The designs in *hiramakie* include maple leaves, chrysanthemums, bamboo, wood grain, waves, and paulownia scroll as well as geometric patterns. There are also shell and metal inlays of butterflies, frogs and bees. Although the technique of gold *hiramakie* is simple, the designs

on each section are quite interesting and it is as if one were looking at a sample book for *makie* designs.

No. 46

*Kawari-nuri, metal inlay*

The sheath is decorated with what appears to be a tideland that is made by using urushi foundation. Lamp black is sprinkled to express the waterside while *urumi-urushi* is used for the tideland. *Urumi-urushi* is also used in dew-like drops on the tideland. On the waterside are four small crabs made of *shibuichi* and a brownish adult crab. The overall atmosphere of the seascape is quite humorous.

No. 49

*Samegawa-nuri, black urushi roiro-nuri, Somata zaiku*

*Samegawa-nuri* is made by covering a substrate with the skin of a ray, coating black urushi, and polishing with a whetstone and charcoal. In old days, ray skin was imported from the Indian Ocean for use on the hilt of a sword. It was also used on exported furniture in the early Edo Period and was quite popular. In this sheath, ray skin is used on the upper half. The contrast between the white ray skin and the black urushi on the lower half is very effective. Since fine Somata *zaiku* (Somata craftwork) using *aogai* is found on the design of willow trees on the pommel and *kozuka*, the sheath may have been made by the Toyama *daimyo* lord.

No. 50

*Samegawa-nuri*

The sheath is carved in fine lines, covered with ray skin, coated several times with white urushi



and polished with a whetstone and charcoal. Normally, ray skin is tanned in order to adjust the thickness before covering the sheath. It would have to be tanned very thinly to cover a surface that has been carved as on this sheath. But if it is tanned too much, then the effect of the skin would be lost. Thus, the craftsman who tanned the ray skin must have been extremely skillful.

## No. 51

*Tatekizami*, black urushi roiro-nuri

Lines are first carved along the length of the sheath and then small vertical carvings are made here and there to create a design of a bamboo fence. After applying black urushi to the surface, black urushi is used again to depict bamboo leaves. Using black urushi on a black design is a type of *kawari-nuri*, representative of which is *yozakura-nuri*. The design on the gold *menuki* of the hilt is that of a priest holding a hanging scroll. A geometric pattern of gold metal inlay on a background of *shibuichi* is found on the *kurigata* metal.

## No.54 and 55

Black urushi, *roiro-nuri*

The sheath is first coated with black urushi. On it an abstract design is depicted with starch paste, which is then coated with black urushi. After the urushi has dried, it is removed to reveal a glossy design from underneath. This is an example of a splendid *kawari-nuri* using the contrast between glossy black urushi and matted black urushi. Together with the gloss created by the whale fin wound around the hilt, the coating creates a very elegant harmony. That the inventory number is not in succession shows that these swords were purchased at different times.

## No.59

*Aogai mijin-nuri*, gold and silver *hyomon*

Family crests in the shape of butterflies are depicted in gold *hyomon*. On this, powdered abalone shell is sprinkled. The sheath is then finished with a coating of translucent urushi and polished with a whetstone and charcoal. The pommel, *kojiri*, sword guard and *kurigata* metal are decorated with silver open work of dragons. The metal fittings and the coating create a gorgeous atmosphere.

## No. 63

*Nunome-nuri*

Normally, *nunome-nuri* is made by covering the surface of a sheath with coarse cloth and applying final coating without filling the mesh. But the surface of this sheath is finished by drawing the lines of the mesh with *shibo-urushi* (yellow urushi mixed with egg white or some protein). *Shibo-urushi* is stickier than normal urushi, so it is possible to make a thicker layer. For this reason, it is appropriate for drawing fine lines.

## No. 65

Black urushi, *roiro-nuri*

Lines are carved on the sheath in such a way as to make slightly rounded incisions. It is then coated with black urushi and polished. Making carvings on a sheath requires great skill because when urushi coated over the carvings dries and shrinks, any defect made in the process of carving will appear from underneath. So the craftsman needs to be extra careful. For the person looking at the finished work, it is an outstanding example of craftsmanship. The only ornament on this sheath is a metal fitting in the shape of a cicada. The tension created by the difficult work of the carving is somewhat relieved by the design of the cicada.

## No. 66

Black urushi, *roiro-nuri*, gold *takamakie*

The shape of the sheath is somewhat rounded. It is coated with black urushi. On the surface are found beautiful designs of cherry blossoms and buds in *takamakie*. *Takamakie* is a technique in which urushi is applied once or twice to raise the design before sprinkling *makie* powder. *Uwa-togidashi makie* used in this sheath is made by sprinkling slightly coarse powder and polishing with charcoal. It is different from *hiramakie*. The faintly pink color of the petals is created by applying red urushi on the petal tips before applying final urushi coating to fix the gold powder. *Hiramakie* is used for the stamens.

## No. 72

Red urushi, black *sendan-nuri*

The sheath is coated with red urushi. Then, fine lines are drawn around the sheath with black urushi to create an effect of black and red stripes. The silver metal fittings on both faces of the hilt harmonize with the *sendan-nuri* for a very elegant impression.